

「アジア地理言語学研究」平成27年度第1回研究会

日時：平成27年10月3日（土）13時～18時，4日（日）10時～16時

場所：AA研303会議室

発表・討論はほぼすべて英語で行われた。今回の研究会は3つの部分からなる。

第1は代表の Mitsuaki ENDO (ILCAA Joint Researcher, Aoyama Gakuin University)による Goals of the Project “Studies in Asian Geolinguistics” 2015-2017 であり，このプロジェクトの最終目標・ねらい・語群ごとの分担者・扱う言語特徴などが再確認された。

第2が本体部分であり，今回の共通テーマである「太陽」に関する地理分布とそれに対する解釈について，アジア全域をほぼすべてカバーする各担当者の発表があった。Hidetoshi SHIRAI (ILCAA Joint Researcher, Sapporo Gakuin University) “Sun' in Nivkh” (以下表題は言語群についてのみ表示); Mika FUKAZAWA (ILCAA Joint Researcher, Chiba University), Ainu; 同発表者による“Geographical distribution of ‘daytime’ in Ainu”; Ryo MATSUMOTO (ILCAA Joint Researcher, Kyoto University of Foreign Studies), Tungusic and Uralic; Yoshio SAITO (Tokyo Gakugei University), Mongolic and Turkic; Shinsuke KISHIE (ILCAA Joint Researcher, The University of Tokushima), Yuukichi SHIMIZU (The University of Tokushima), Yukako SAKOGUCHI (The University of Tokushima), “Dialects associated with the word *Taiyō* (Sun) in Japanese”; Rei FUKUI (The University of Tokyo), Korean; Yoshihisa TAGUCHI (Chiba University), Hmong-Mien; Mitsuaki ENDO (ILCAA Joint Researcher, Aoyama Gakuin University), Tai-Kadai; Satoko SHIRAI (ILCAA Joint Researcher, Reitaku University), Keita KURABE (ILCAA Joint Researcher, JSPS), Kazue IWASA (Kyoto University), Hiroyuki SUZUKI (University of Oslo, National Museum of Ethnology), Shiho EBIHARA (ILCAA Joint Researcher), Tibeto-Burman; Mika KONDO (ILCAA Joint Researcher, Osaka University), Austroasiatic; Takashi UEYA (ILCAA Joint Researcher, Kyoto University of Foreign Studies), Kenji YAGI (ILCAA Joint Researcher, Kyoto University), Sinitic; Noboru YOSHIOKA (National Museum of Ethnology), South Asia; Yoichi NAGATO (ILCAA Joint Researcher, Tokyo University of Foreign Studies), Arabic であった。以上を通算すると当初目標としていた「アジア全域1000地点」は優に到達しており，2000地点を超えるものと見られる。このような地点密度において個別の単語に関する地理分布が描かれることが初めての語族が多く，古典的な言語地理学をアジア全域において開始するという第一の目標が既に達せられたことは感無量であった。

内容的に印象的だったことをいくつか挙げておく。「太陽」が日本語・朝鮮語・中国語のように擬人化や崇拜の対象になっている言語があったり，インド系ないしその借用語のように太陽神の名前が使われたり，中国系の「太陽」のように陰陽五行説のような思想面の反映が色濃くみられた。アラブ系でそのようなことが見られないのは偶像崇拜を禁ずるイスラーム教の背景を考えるとよいかもしれない。アジア全域を対象とした比較宗教学・比較思想の専門家に教えを乞うべきことが多そうであるのは予想外の収穫であった。また，「太陽」「日差し」「昼間，一日(太陽が出ている時間)」などが同語ないし同語から派生した

と思われる形式によって表される言語群が多いのは意味的な言語普遍性を反映するであろうが、福井玲氏により朝鮮語の「年」と「太陽」が単なる同音異義語ではなく派生関係がある可能性が指摘されたのは興味深かった。このような意味の派生関係に関してアジア全域でどのようなタイプがあり、その地理分布がどのようなものであるかに関しては更なる探求の対象となる。その一方で、深澤美香氏がアイヌ語に関して「太陽」と「月」を共に意味する語がまずあり、区別する場合に付加要素をつけて「太陽」や「月」を表すというタイプの存在を報告されたことも意義深い。深澤氏が共通課題に関連して「太陽」にまつわる諸問題を詳細に論じられたのも有益であった。また、「目」＋「空、昼間」の語構成によって「太陽」を表す一連の語族があり、タイカダイ・オーストロネシア・オーストロアジアなどについてはこれまでも知られていたが、より精密に地理分布が突き止められ、またこのような観点に基づき従来は閑却されていた類似例が中国語にもあることを八木堅二氏が見出した。これは言語学でいうカルク *calque* の例となるが、このような基礎語彙に存在すること、また地理分布が重なること、更にそうした地域とは別に独立にそのような語形が出現しうることから意味的な普遍性ももつことなどが分かる。

第3は所内からの副代表である Makoto MINEGISHI (ILCAA Staff) および Toshiki OSADA (Research Institute for Humanity and Nature), Masaaki SHIMIZU (ILCAA Joint Researcher, Osaka University), Atsushi YAMADA (ILCAA Joint Researcher, Japan Health Care College) による *A Survey of Recent Austroasiatic Studies* であり、オーストロアジア語に関する近年の記述研究・比較研究に関する概観を行った。これは『言語学大辞典』刊行後から30年ほど経て、進展著しい各語族に関する研究状況をフォローしようという雛形であり、このプロジェクト期間中にその他の語族に対しても引き続きこのような概観がなされることが期待される。

(遠藤 光暁)